

!!古墳時代から日本にクリスチャンがいた!!

高校時代から私がこれまで目にした歴史書で大昔の日本にクリスチャンがいたなどと書かれた本に出会ったことがない。ごく最近、知人から長谷川勝義氏の著作「ゴッド(神)への道—日本の歴史を通して」を拝見し、少なくとも飛鳥時代にキリスト教信者が大陸から渡来し住んでいたことが書かれており驚きを禁じえなかった。魏志和人伝にもあるように卑弥呼の時代にすでに日本は中国と正式に交流があり、渡来人も多く住んでいたのは確実である。その中で特に有力な氏族として知られる秦氏がキリスト教徒だったというのである。それは推測でなく歴史的事実とされている。中国はイスラエルあるいはローマとは陸続きであり早くから中国や朝鮮半島にキリスト教(以下景教)が伝来していたのである。秦氏は秦の始皇帝の子孫とされているが景教徒だったという。秦氏が日本に渡来してきたのは第15代応神天皇(270年、古墳時代)のころらしいが、中国では景教の寺院を「大秦寺」と称していた。京都に太秦という地名があるが、そのあたりは秦一族が多く住んでいた所であり、そこに広隆寺というお寺がある。ここは国宝第1号に指定された弥勒菩薩半跏像(飛鳥時代、隋様式)で有名なお寺であるが、古くは太秦寺と呼ばれていた。創建者は聖徳太子の政策ブレインだった秦押勝で太子のために建造したと言われている。しかし法隆寺様式で建設されていたのでいつ頃からか広隆寺と呼ばれるようになったようである。

一方、秦氏より後に渡来してきた有力氏族として日本に仏教を伝えた蘇我氏がいる。彼らも大和政権に食い込み、それまでの神道派の物部氏と対決して滅ぼし、以後政権は仏教一色に染まる。蘇我派についての聖徳太子ではあるがそれでも秦氏の景教イズムにかなり影響を受けていると言われている。太子が馬小屋で生まれたので厩戸皇子と称されたのもキリストが馬小屋で誕生したことに因んだのではとの説もあり、秦氏との強い結びつきが伺える。

秦一族は日本に帰化して広く分布しているが、日本を景教化するよりも機織や染色技術を伝え広めた技術集団としてよく知られる。絹をつくる養蚕技術も然りである。広隆寺に絹糸や布を染めたと伝えられる古い井戸がある。また寺の近くに養蚕の場所と伝えられる「蚕の社」という神社があるが、これも秦氏が造った社と伝えられており、そこに珍しい三角鳥居が境内に建っている。3本の柱で△に組み合わせた鳥居である。これも秦氏が建てたと言われているが、キリスト教の三位一体と日本古来の神道とが融合したシンボルと解釈されている。それで私はこの11月初旬その鳥居の写真を撮りに出かけたが周囲に柵があって近寄れず△の形がよくわからない。しかしたまたま京都秋の非公開寺院の特別公開で南禅寺塔頭の大寧院(現在の大寧軒)の庭園に広隆寺の鳥居をモデルにした少し小型の鳥居があり、しかも上から△形がよく見えることを知り、早速公開中の大寧軒に出向いた。確かに池の中にあって斜め上から鳥居の組み方がよく見える。ところが写

真撮影禁止！ そんなことを高山右近研究所主宰のK氏に話したところ早速 Net か何かの資料から引用された大寧軒の△鳥井の写真を送って下さった。

左から 広隆寺国
宝弥勒菩薩、染水用
古井戸、大寧軒△鳥
居、蚕の社△鳥居



さて、長谷川さんの本にはさらに驚くべきことが著されていた。それは群馬県高崎市の多胡遺跡から「INRI」と刻まれた古銅板が出てきたと言うのである。多胡遺跡とは 711 年(和銅 4 年)に建立されたという多胡碑(1954 年特別史跡指定)の銘文の字体の素晴らしさで知られる。碑文の中に「多胡郡を設け、羊に支配させる」とあり、多胡や羊の意味については古くから諸説ある由。羊は羊を放牧監督する羊飼、あるいは聖書にある民を羊に例えて多胡郡の市民を治める長「多胡羊太夫」など。多胡(発音はタゴ)については中央アジアや西域系の胡人が多く居たからとか、単なる地名とする諸説ある。もともと古墳時代の昔は羊など居なかったろうし、羊や胡という字も渡来人がもちこんだと思う。一方、東北地方にも秦氏が住んでいたという説を見たことがある。もしそうなら胡とは秦氏の一族で、彼らが羊を持ち込んで飼育、羊毛を織っていたとも考えられる。中国には胡(fu と発音)の姓を持つ人が多く、私の中国の知人にも二人いる。今日本人で胡姓をもつ人がいるかどうか聞いたことがない(日本人名録には多胡や田子などはある)。

私が注目したいのは多胡遺跡から石の十字架とキリスト教のシンボルである INRI と刻印された古い銅板が出ていたという話である。長谷川さんによるとこの話は九州松浦藩主だった松浦静山の著書「甲子夜話」に詳しく載っているとのこと。INRI(I は J と書かれる)と刻まれた墓碑は大分県竹田市の長湯温泉と臼杵市からも発見されている。しかしこれらは秀吉や家康の頃のキリシタン墓碑である。ところが多胡遺跡は和銅時代である。和銅とは日本で初めて秩父で銅が発見され銅銭(和同開珎)が铸造され貨幣時代を迎えた時代である。それまでの銅や銅製品は中国・朝鮮からの渡来品であり、日本国内における製銅技術も渡来人がもたらしたのである。ともあれ INRI と刻印された古銅板が和銅時代の遺跡から出てきたのが事実なら、都から遠く離れた東北にもキリスト教を信奉する人達がいた証拠? である。そこで早速多胡記念館の学芸員さんに電話して話を聞いてみた。学芸員さん曰くに、「多胡遺跡については古くから資料が多く関心度が高いが十字架や古銅板の記載は静山の「甲子夜話」のみで信憑性に欠ける。現在そういった物証もない。物証がでてこないかぎり信用できない。多胡碑の羊云々も羊を放牧していた渡来人がいたという証拠にはならない」との話だった。確かに専門家としてはそうかもしれないが私は松浦静山ほどの人がわざわざ作り話を書いたとは思えな

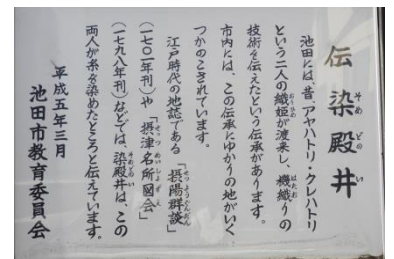
い。松浦氏は平戸である。平戸はザビエル始めキリシタンとの関連がもっとも深い地域で静山は誰よりもキリスト教に関心があったに違いない。

私の思うに、禁教の徳川時代に十字架などキリスト教関連の物が公然と保存されるはずがない。当然処分されたであろう。また徳川時代ではその事実を知っていても公然と記録するわけがない。静山ほどの大物だからこそ、しかも甲子夜話なる私的なブログだから書き残せたのであろう。一概に信用できぬ偽話と決めつけるのは如何なものか。

さて私のかつての職場のあった池田市には昔秦氏が多く住んでいた。当時池田あたりは秦上郷、秦下郷と呼ばれ、ほかに細川郷などがみえる。今も職場に近い所に畑(はた)という地名があるが、これも畑=秦とされる。一方、池田市に「アヤハトリ・クレハトリ」の伝説が古くから受け継がれている。この話は「昔クレハトリ・アヤハトリの二人の姉妹が呉の国からやってきて猪名川を遡り、唐船の湊(池田市にある)に上陸、機織りや染色技術を伝えた。その後クレハトリは呉服(クレハ)神社、アヤハトリは伊居太神社に祭られた」というものである。彼女らが絹糸を染めた井戸(染殿井)の跡が市の史跡として保存されている。先日池田に出向いてその写真を撮り、ついでに池田市の歴史民俗資料館に立ち寄って学芸員さんにこの伝説について聞いてみたが、学芸員さんは事実ではないと否定されていた。このような伝



説は兵庫県や奈良県その他複数あり池田固有のものではない、池田に機織り技術を伝えたのは秦氏で、彼らは古代の池田の町づくり(今は痕跡程度だがかつては奈良や京都のような条理制の区割りがなされていた)にも貢献したと学芸員さんの話である。池田は近畿でも古い歴史のある先進的都市だったのである。そのためか平安時代池田は藤原氏や京都の公家の荘園でもあった。



さてここからは私の勝手な推測だが、大陸からの渡来経路は卑弥呼の時代には日本は中国と正式に交流していたので決まったルートがあったと思うが、それ以前は海流に乗って北九州や出雲、丹後半島、能登、男鹿半島などに漂着したと考える。近畿圏への初期の渡来人は丹後半島経由と思う。景教徒の秦氏らも丹後半島からの渡来ではなかろうか。丹後に峰山、網野、与謝という絹織物の一大産地がある。与謝から少し南下すれば福知山、更に南下して丹波篠山、そこから峠を越えれば池田である。福知山の隣にやはり織物の産地綾部があり、そこから京都へも遠くない。京都には世界に誇る絹織物の西陣がある。こうしてみると彼ら渡来人が丹後から近畿まで経由した各所に絹織物で栄えた町が多い。渡来人が機織り技術を携えて移動した証拠であろう。

ここで私が注目したいのは与謝と福知山の間の大江山の近くに元伊勢という地名と神社がある。地元ではここから伊勢へ遷宮したと言う。今でも伊勢神宮の

祭事には使者を派遣するといわれる。しかし伊勢神宮の祭神である九州高千穂の天照大神が伊勢に赴く前ここに鎮座したとは考えにくい。では元伊勢は誰が建造し祭神は誰か？ 私は景教徒の秦氏が景教の教会として建てたのではと考える。そしてそこに聖母マリヤの像を置いていたのではないか。古代の日本は山や岩そのものをご神体とする自然崇拝で神を祭る神殿はなかったのである。一方キリスト教の教会は祈りの家であって神を祭る神殿ではない。ただカトリックでは多くの教会でマリヤ像を飾っている。そこからマリヤ信仰ではという人もいるほど。しかしマリヤは決して信仰の対象となる神ではない。多分秦氏もマリヤ像を携えて大和まで南下していったのではないかと私は推測する。しかし自然神道を信奉する物部氏が勢力をふるっていた大和政権に近づくには神道との共生もやむ得なかったろう。しかし秦氏が政権内の実力者の地位を得るに及んで天皇が皇祖としている天照大神とマリヤがいつしか融合して伊勢に社を建造したのではないかと。ともあれ伊勢神宮の建造は自然崇拝(大和の三輪神社は今でも三輪山をご神体とし、拝殿のみで神殿はない)から神が神殿に鎮座する神社崇拝への契機となったといえよう。一方、伊勢の外宮の祭神は豊受毘売大神(豊受姫)であるが、この神(五穀豊穡の神)は雄略天皇のころ(470 年前後?)丹波から勧請されたとの言い伝えがある(日本書紀)。もしそうなら秦氏が一族の繁栄を願ってマリヤの化身としての豊受姫を勧請し外宮の祭神とした、と考えるのは少し言い過ぎだろうか？ さて、ここで問題は(日本書紀によれば)大和政権による伊勢遷宮の時期が垂仁天皇の時代である。これはキリストの時代にあたる。景教徒の秦氏が大和にやって来たのはもっと後である。ちなみに 3 世紀の人物である卑弥呼がもし大和に居たのなら中国に使節を送っていたほどの権力者・卑弥呼がすぐ近くで大和政権と対峙していたことになり、魏志倭人伝がそれを見過ごすわけがない。初期のころの天皇年代記は欠史が多く、天皇の寿命が何百年といった考えられない記録も多々あり信用できない。やはり伊勢神宮内宮の建造は 5 世紀後半以降であろうか。秦押勝が聖徳太子のブレーンだった時代は 6 世紀後半だからこれなら辻褃があう。いずれにしろ出雲大社も伊勢神宮も社殿を建造したのは秦氏ら渡来人であることは間違いないと考える。神域の入り口を示す鳥井も中国からの渡来形との説が有力である。中国の田舎を旅行すると村の入り口に立派な木造の門をよく見るが、鳥居はまさにそれらを簡略化して模したものであろう。古代、景教徒の渡来人がマリヤを天照大神に映して神道との融合を図りながら伊勢神宮を建造した一方、秦氏の景教はいつしかその後の渡来仏教にも飲み込まれて自然消滅したとの奇想天外な推理など誰からも支持されるわけありませんが、年末の忙しいときにこんなことを考えてみるのも一興かと思う次第です。それにしても現政権が神道天皇を元首とするかつての専制国家への転進を画策しているのは甚だ由々しきことである。しかも政教分離の現憲法下にあって、天皇の政治利用や神道天皇の宗教的祭事(来年の大嘗祭など)に国家予算をあてるなどは明白に憲法違反である。